
笑ってはいけない

猫舌ソーセージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑ってはいけない

【Nコード】

N0446C

【作者名】

猫舌ソーセージ

【あらすじ】

ある愚かな王様がいた。王様はあるとんでもない法律を作り出す。それは「決して笑ってはいけない」というモノだった。

何処かの星の何処かの島にある一つの豊かな王国がありました。

王国には、優秀な王様がおり王様のおかげで人々は幸せに暮らしていました。しかし、王様は人格者であり素晴らしい人物でしたが、その息子の王子はとても頭と性格の悪い王子でした。人の気持ちを思いやる事も知らず、我が儘放題。王子に仕えている者達は大変苦勞していましたが、王様の後継者である王子に逆らう事など出来る訳もなく、ただひたすらに耐えていました。

そして時は流れ二十年後。王様は心臓の病によって亡くなり、新しく息子の王子が王様になりました。人々は王様が亡くなった事を嘆き、そして新しい王様が愚か者である事に嘆きました。この国はこれからどうなってしまうのか、人々は不安で仕方がありませんでした。

新しい王が誕生したという事で、街ではパレードが開かれていました。とはいえ、心から歓迎している者は誰一人おらず、皆力タチだけのお祝いでした。それでも新しい王はそんな民衆達に気付く事もなく上機嫌で、街中を多くの家臣達を連れて行進しました。

新しい王は愚か者である。そんな事は街中に知れ渡っていた事だった。住民達の中には、そんな愚か者の王がどんな顔をしているのか見てみたいという好奇心で、パレードを見学する者もいました。

「はっはっは、皆が私を歓迎しておるのう」

王様は多くの人々が集ってきたのを、自分の人気であると勘違いしていました。そんな王様の元に一人の家臣がやってきて言います。「王様、この辺で一つ演説をなさっては如何でしょうか」

「ふむ、良い案じゃの」

家臣は民衆の不安を取り除こうと、王様に今後の国政を演説してもらおうと提案した。しかし、王様は何を勘違いしたのか急に皆の前で歌を唄い始めた。家臣達も民衆も突然の王様の不可解な行動に

啞然としてみていた。王様は一曲歌い終わると家臣は王様に訊ねた。
「あの、王様。今後の国政に対する演説は？」

「ん？ コクセイってなんじゃ？ うまいのか？」

その言葉を聞いた時、家臣達はそれが王様のジョークだと思った。此処は笑わなければならない。そう判断した家臣達は一樣に大笑いし出した。

「わはははは！ 王様、面白いジョークですね！」

「いやいや、本当に王様のジョークのセンスは素晴らしいですね。あははは！」

「国の王が国政を知らぬ筈がないじゃないですか、だはははは！」
大笑いが巻き上がると、王様の言葉が他の者達にも伝わり、その笑いはどんどん大きくなっていった。家臣達に留まらず住民達も大笑いをし出す。愚か者だと思った王様にも笑いのセンスがあるのだな、そんな風に皆は取っていた。しかし――。

「―――― めろ」

王様が俯き加減に小さく言葉を洩らした。近くにいた家臣ですら良く聞き取れない声で。家臣は王様に訊ねる。

「なんででしょうか、王様――！！？」

そう訊ねた時に家臣は気付いた。王様が顔を真っ赤に染め、小刻みに震えている事に。

「笑つのを止めろと言ったんだ！！」

王様は声を大にして言い放った。その声が空気を揺らし、街全体に響いていく。一瞬で笑い声は消え、まるで誰もいない夜の街かの如く静まり返る。だが、そんな静寂も一瞬で王様のとんでもない言葉で静寂は破られる。

「笑った奴らども全てを引っ捕らえよ！ 家臣も国民も全てじゃ！」

王様の言葉に一瞬何を言っているのか皆は理解出来なかったが、すぐにその意味に気付き笑う事をしなかった家臣達が王様の命令を実行する。この国では、どんなに頭の悪い王様でも、どんなに理不尽な命令でも、王の命令は絶対だった。

こうして多くの人々が国王侮辱罪により処刑された。そして新たな国王が作った新たな法。

それが『笑止千万法』だった。笑止千万とは、本来非常に馬鹿馬鹿しい事やその様を表したり、いかにも気の毒な様を指す。だが、低脳な王様はそれを笑う事を禁止、止める事だと認識していた。しかし誰もそれを指摘したりはしない。もしそんな事をすれば、自分も処刑されてしまう。そう考えたからだ。笑止千万とは、まさに王様自身の事を指していた。

ともあれ愚かな国王の作った愚かな法により、国民達は人間が唯一表す事の出来る感情を禁止されたのである。

暗い独房の中に一人の青年が足を抱えて座り込んでいた。青年は小刻みに体を揺らし、ガチガチと歯を鳴らせていた。それは恐怖から来る行動であった。

青年は幼い頃からよく笑う子供で、お笑いが大好きだった。将来は人に笑いを与える仕事に就きたいと常々思っていた。だが、新たな国王の新たな法律によつて、そんな夢は打ち砕かれた。笑う事の許されない国。それは青年にとっては苦痛以外の何物でもなかった。そこで青年は、人々から隠れてお笑いの勉強をし、自分と同じ志の者を集めて毎週のように自分の考えたネタを見せ合う『ネタ披露会』という催しを行っていた。そこには、失われた筈の笑顔が絶えずあった。笑い声があった。それはとても楽しいひと時であった。しか

し。

ある日、いつものようにネタ披露会を行っている、突然その場に大勢の兵士達が押し寄せて来た。

「笑止千万法違反により逮捕する！」

男達は蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。だが、兵士達の数は圧倒的であり一人残らず全員が捕まる。男達は刑が決まるまで独房で身柄を拘束される事になった。

「そんなに怯えなくても良いだろうに。ちゃんと弁護士はつけてやるんだ。運が良ければ死刑だけは免れるかもしれんぞ」

独房の前で見張りをしている兵士が、独房の中で縮こまっている青年にそう話しかけた。そんな言葉に青年が安心などする訳もなかった。何故なら、笑止千万法に違反した者は今まで残らず死刑判決が言い渡されて来ているのだ。自分も殺される。そう思うと恐ろしくて恐ろしくて震えが止まらなかった。

青年が捕まってからどれぐらいの日時が経っただろうか、独房はいくつかに分けられており、青年の仲間達も数名いた。兵士の見張りが無い時に青年達は、お互いに励まし合い愚かな国王に対する非難を口にしていた。だが、そんな仲間達も数日の間にどんどん減っていた。見張りの兵士は言う。

「残念だが、全員死刑になったつてよ。お前はあの集団のリーダーだったからな、刑が言い渡されるのは最後だ。あーそうそう。今日弁護士を連れてくるから色々と相談してみるといい。まあ、神に祈るんだな」

見張りの兵士は哀れんだ瞳で青年を見つめながら言った。青年はただ恐怖に震えるばかりだった。

数時間後、青年の独房の前に一人の弁護士が現れる。青年はその弁護士の風貌をみて愕然とした。弁護士の髪は金色に染められており、耳にはピアス。瞳は青くガムをくちやくちやと噛んでいた。年

は若く青年とほとんど変わらないように見えた。

「どうも、あんさんの弁護士をさせていただきます、日向日向と言います。どうぞよろしゅう」
ひゅうがひなた

鉄格子越しに弁護士日向は言う。青年は弁護士があまりにも若く、国がろくでもない弁護士を自分に付けたのだと悟った。青年は震える声で日向に訊く。

「あの…… 弁護士さんは、今回で何回目の弁護になるんですか？」
青年はこの弁護士が一体何度勝利を収めているのか訊きたかったのだ。しかし――。

「今回が初めてですわ。ほんま緊張しますな。しかも最初の弁護がこの国で最も重い罪を犯したあんさんだから、大変ですわ」

青年の体から力が抜けていく。もう終わりだ、全て終わりだ。青年は小さくそんな言葉を何度も呟いていた。完全な放心状態になった青年を見て、見張りの兵士はやりきれない気持ちになっていた。

「あー兵士さん、二人だけで色々相談したいんでちょっと席外してもらってもええか？」

突然の日向弁護士の申し出。だが、兵士はその申し出を断った。二人だけにして何か問題が発生した場合、その責任は自分に向けられるのだ。そんな申し出は受け入れられる筈もなかった。

「そうかー。じゃー仕方ないわなあ」

「な、なんだ？」

日向弁護士は見張りの兵士を見据えながら、ある行動に出た。

暫くすると、そこには二人つきりで話す日向弁護士と青年の姿があった。見張りの兵士はというと、独房から離れた場所に立っていた。その兵士の目からはうつすらと涙が浮かんでおり、顔はヒクヒクと引き攣っていた。

「――という訳や。今回の裁判は王様直々に見に来るらしいからな。絶好のチャンスやで」

「ほ、本当にそんな事が可能なんでしょうか……。僕には自信が……いえ、どうせこのままでは死刑になるんです。わかりました。日向弁護士言う通りにします」

「おっしや！ 裁判は明日やで。気張って行こうや！」

二人は固く握手を交わした。

そして裁判当日。

この日、裁判所の傍聴席は満員となった。傍聴者は誰もが死刑は決定していると思っている。そして誰もが死刑になる青年を哀れんでいた。王様一人を除いて。そもそも裁判というのは、王様が国民達に見せしめとして開いているに過ぎない。裁判など開かずとも王様の権限のみで死刑にする事は可能なのだから。だからこれは刑のすでに決まっている茶番なのだ。と皆は考えていた。

「それではこれより裁判を開廷致します。被告人前へ」

裁判長の言葉に青年は前へと出る。両隣には、弁護士日向と検察官。

「では、罪状を」

裁判長が促すと四十代後半ぐらいのベテラン検察官が口を開く。

「被告人は多くの人々を惑わし、隠れてネタ披露会というものを毎週開催していました。そして、その場で多くの人々を笑わせまた被告人自身も大笑いを繰り返し、笑止千万法に触れる行為を幾度となく行っていた模様です」

「それは確かですか被告人」

検察官の言葉を聞き、裁判長は被告人に訊ねる。青年は「はい」とその行為を認めた。その言葉を聞いて誰もが早い決着になったなと思った。何故なら青年に出来る反論はその行為を認めない事のみ。そう考えられていたからだ。

「弁護人の方から何かありますか？」

「はい」

弁護士日向は前へと出ると青年の隣に立った。そして――。

「あつさり認めてどうすんねん！」

そう大声で言いながら青年の後頭部を思いっきり叩いた。パチーンと静穏を保っていた法廷内に音が響く。皆は何事かと呆然とする。「ちよつ！ 強く叩きすぎですよ弁護士！ つつこみつてレベルじゃないでしょ！ 頭が取れたらどうすんですか！」

青年が反論する。

「あー心配しなさんな。どうせあんさんは死刑になったらギロチンで頭取れてしまふんやから」

「ちよ、ちよつとちよつと！ そんな縁起でもない事言わないで下さいよ！」

「いや、事実や。残念ながら俺には、あんさんを弁護できる力はない」

「えーっ！ 諦めるの早っ！ まだ裁判開始から十分も経ってない

よ！」

「十分で十分や」

「ダジャレかよっ！」

それは明らかに漫才だった。突然行われた漫才に人々は戸惑う。

検察官も裁判長も王様ですらそれを止める事を忘れ、ただただその漫才を見ていた。その漫才は大したレベルのモノではなかった。普段ならそれで笑うという事はない。だが、この場は絶対に笑ってはいけない場である。もしも笑えば即罪を問われる事になる。しかし人間というのは不思議なもので、笑ってはいけない場であればあるほど、どうしようもない事で笑ってしまいたくなる生き物である。

普段笑えないと思っている番組を絶対笑わないぞと決め、口に牛乳でも含んで見てみるといい。普段よりも不思議と笑えてしまうから「ぷっ……ぶふおっ！」

傍聴席の一人が堪らず噴出した。それに釣られて隣の人も、そしてその更に隣の人もというように笑いが伝染していく。裁判長や検察官、王様はすぐにこの漫才を止めたかった。しかし、口を開けば

その拍子に笑ってしまいそうで、口を開けなかった。

「ふとんがふつとんだ！」

「なんやそのギャグ…… あんさん才能なさすぎや」

「あんたに言われたくないわっ！」

笑いがどんどん広がっていく。最早過半数は超えているだろう。

あまりにも寒すぎるギャグ、それが逆に笑えて仕方なかった。日向弁護士と青年はあらゆる笑いのツボを刺激する為に色々な方向性の漫才を繰り広げた。そのツボにハマってしまう者、笑い声に反応して笑ってしまう者など様々だ。そしてそれが続くと、とうとう――。

「ぷつぷくっ！」

裁判長や検察官すらも堪えられず笑い出した。最早法廷内は爆笑の渦に巻き込まれていた。

「あははははははは、もう駄目、やめてくれ！」

「がははははははは、死ぬ死ぬ！ 二重の意味で死ぬ！」

「ぎやはははははは、久々に笑った。楽しすぎる！ あーもう死んでもいいわ！」

「ぐわはははははは、こいつら最高だよ！ 全く何してくれてんだよ！」

様々な笑い声。様々な笑い顔。日向弁護士と青年は漫才をしながら、そんな笑いを見て心地良い気持ちになっていた。だが、まだまだ笑っていない者がいる。それは最も笑わせなければならぬ相手、王様だった。王様も笑いそうにはなっているが、まだ決め手が足りなく耐えている。そこで青年は最終兵器を取り出した。

「王様、ちよつと失礼します」

青年は王様の頭にソレを乗せた。それはチョンマゲのカツラだった。そしてそれを被せた後に一言。

「おう、さまになつてー！」

その一言で王様の顔付きが――真顔に変わった。

「あ、あれ？」

それはあまりにもつまらないギャグだった。逆効果だったのだ。

王様が爆笑し出した。その笑いは豪快で皆が久しく聞かなかった王様の笑い声だった。王様が笑ったのを確認すると日向弁護士は手を外した。そして皆に言う。

「この通り王様も笑ったで。という事はや。この笑止千万法をこのまま成立させるなら、ここにいる全員が重罪になるってことやな？」

俺はそれでもええんやでー。だって俺は一度も笑ってへんからな」

日向弁護士はしたり顔だ。皆は啞然とした後、王様に視線を集めた。皆が王様の決断を待っている。王様は顔を上げ日向弁護士を見据えて言う。

「日向とやら、それでしてやったりのつもりか？ 残念じゃな。わしは国王じゃ。わしだけは法を犯しても許される。此処の皆は全員死刑にするがのう。あーそれとお前も死刑じゃ。何故かって？ わしが決めたからじゃ！ 笑った者どもを引っ捕らえよ！」

王様はやはりどこまでいっても愚か者であつた。王様の自分勝手な言い分に、さすがに皆憤りを感じていた。

「何をしている！ 早く捕まえよ！」

王様が叫ぶ。しかし――。

「王様、此処にいる『全員』が笑ったんやで。それとも何か、自分を自分で捕まえよとも言つつもりなんか？」

日向弁護士の言う通りだった。王様が連れていた兵士も傍聴していた国民も裁判長も検察官も全てが笑ってしまっていたのだ。だから捕まえろと言われても誰一人としてそれが出来る者などいなかった。

「な、ならば自害しろ！ これは王の命令だ！」

とんでもない事を言う王様。この国では王の言う事は絶対。だが、さすがにそんな命令に従える者などいる筈がなかった。

「王の命令は絶対。それがこの国の昔からの掟やったな。裁判長」
「う、うむ」

日向の問いに裁判長が頷く。すると――。

「じゃー今からこいつは王様じゃなくしてしまえばいいんやないか

？」

「——え！？」

一同がそんな驚きの声を洩らした。

「だってこいつは王である前に罪人やで。罪のない人々を今まで何人も殺してきたんや」

日向の言う事は最もだった。

「ふ、ふざけるでない！ そんな事誰が聞き入れるモノか！ 国王はこのわしじゃ！」

「王様……いや、お前が決めるんじゃない。国の王は人々の事を真剣に考えられる人間の事を言うんやで。皆に聞こうやないか。こいつが王でほんまに良いんか？」

日向の問いに皆は答えられない。王はすぐにでも皆が自分を認めると思っていた。しかし予想に反する状態に驚き戸惑う。

「もし王様を王だと認めたら……俺死ぬんだよな」

傍聴人の一人がぼつりと零した。

「そ、そうだ。僕は死にたくない！」

皆が王と自分の命を天秤にかけ始める。そうなれば、もう決まったも同然だった。以前の素晴らしい王様ならともかく、今の王に命を差し出す者などいるはずもなかった。

「決まりやな」

「ふ、ふざけるでない！ こんな事が許されると思っているのか！ ええいつ！ 離せっ離せえいつ……——」

それから暫くして笑止千万法は廃止された。新しい賢く若い王も誕生し、国民達は盛大に新しい国王を迎えた。新たな国王は国民達に告げた。

「この国を、笑いで絶えない国にしたるで！」

新たな国王の築く国は、その後世界一発展した国へと成長してい

つたのである。
めでたしめでたし。

（後書き）

楽しんで貰えたら嬉しいです。まだまだ未熟ですがどうぞ宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0446c/>

笑ってはいけない

2010年10月8日15時58分発行